

(1) Folena, Gianfranco, *Il rinnovamento linguistico del Settecento italiano*, in *L'italiano in Europa*, Torino, 1988, p. 5-66. が適切な概観をあたえてくれている。

第三章 あらたな問題群

1. 18世紀の〈言語危機〉と啓蒙主義⁽¹⁾

イタリア語は、もはや、ほとんどだれにも話されてはいなかった。ちょうど、ユマニストが古典ラテン語にたいしておこなったのとおなじように、クルスカ・アカデミーの言語純粹主義は、古典イタリア語を崇拜するあまり、言語を書物のなかにとじこめて、〈死語〉

にしてしまった。もちろん、クルスカ・アカ
 デミーのちからが、それほど強大であつたと
 いうのではない。これは、イタリアの文化状
 況、社会状況そのものが生みだした事態なの
 であつて、クルスカは、ただその脆弱な象徴
 であつたというだけである。

イタリア語が「死語」であることは、クル
 スカを批判する者はもちろん、クルスカを支
 持する者でさえみとめていた。

ヴェネツィアの啓蒙主義者アルガロッティ

(1) Vitale, M., *Questione della lingua*, p. 316.

は、イタリアの文学伝統と言語の固有性を守
 りつつ、近代的思考を表現しうるような言語
 のありかたを、もとめていたが、クルスカの
 旧態依然の頑迷さには、はげしい批判をぶつ
 けざるをえなかつた。かれは書いている。「
 物識り顔の学者たちが、むかしの作家のな
 かでつくりあげられた文体に心をうばわれ
 いたため、わたしたちの言語は、だれも話す
 ことの無い、死語 (una lingua morta) になつてし
 まつた。」

4) Vitale. M., op. cit., p. 277

同じくヴェネツィア人のカルロ・ゴッツィイは、フリスカの純粋主義を全面的に支持して、1747年に、「われわれの文学のことばの純粋さ」を守るために、グラネレスキ・アカデミーという名の団体を、ヴェネツィアに設立したほどである。だが、ゴッツィイによれば、トスカナ古典作家のことばは、「死語 (le lingue morte) として学び習得する」⁽¹⁾必要があった。純粋なことばは、けっして、現実社会の汚染にさらされてはならないからである。

イタリア語が「死語」であるとは、ほとんどきまり文句のようになり、何人かの作家がそのことを口にもぼせるようになる。19世紀になると、マンゾーニが、より切実な社会意識をもって、この事態を感得することになるだろう。

ところで、ゴッツィイは、ただのアカデミー主義者ではなかった。かれは、ひろがりつつあるフランス文化の影響に対決して、イタリアの文化伝統を擁護しようとしたのであるが、

擁護すべきは、クルスカだけではなかった。
 ヴェネツィアの民衆的伝統に根ざす、コンナ
 ディア・デッラルテもまたそうであったので
 ある。ゴッツィは、この即興仮面劇のために
 多くの台本を書いたが——もちろん、用いら
 れるのは、文学イタリア語ではなく、ヴェネ
 ツィア語を主とするく方言である——。そ
 の伝統的な即興性、身体性、意外性の性格を
 守りつづけ、非現実的なく夢幻劇の要素を
 強調した。このゴッツィの立場と対立したの

が、くコンマディアの改革をめぐしたゴル
 ドーニである。
 ゴルドーニは、モリエールにはじまるフラ
 ンス近代喜劇にならって、コンマディアを、
 社会的日常生活のなかでの人物の心理描写を
 重んずるくコトバの演劇へと近代化し
 ようとはかった。ところが、そのゴルドーニ
 にとって、もっとも手ごわい相手が、イタリ
 ア語であった。ゴルドーニは、ヴェネツィア
 語でも多くの作品を書いたが、より広い公衆

に語りかけるために、イタリア語で書いた作品は、あまりかんばしい評価をうけられなかった。そのイタリア語は、ヴェネツィア語にはあった自発性、表現性を欠いた、つくりもそのような感をあたえたのである。「しかし、それは作者の罪に帰すべきではない。ただ、中間調の会話の言語は、まだ生まれていなかったというだけのことであるから。当時のブルジョワジーは、イタリア語で話さなかったのである。特に、ヴェネツィアでは、方言を

- (1) Durante, Marcello, *Dal latino all'italiano moderno*, p. 223
 (2) ただし、Folenaによれば、ヴェネツィア語からイタリア語さらにフランス語という単線的発展をそこに見るべきではない。これは、ゴルドーニにとって、対等な表現手段だったのであり、初期のヴェネツィア語の作品にも、そのヨーロッパ性はまざまざと感じられると言う。
 cf. Folena, Gianfranco, *L'esperienza linguistica di Carlo Goldoni*, in *L'italiano in Europa*, Milano, 1983, p. 89 - p. 132.

信頼しきっていた⁽¹⁾さらに、ゴルドーニは、ゴッツィとの論争に破れたのち、フランスに去り、パリのイタリア座の座付作者となる。そして、そこでフランス語による作品と、三巻の『覚書』を書きつづけ、革命のさなか、1792年に、パリで客死する。

このゴルドーニの言語的変遷は、ひじょうに象徴的な意味をもっている。十八世紀のく言語危機⁽²⁾とよばれるゆえんは、イタリア語がく書物のことば⁽²⁾になったあげく、方言と

の、また方言間での言語的分裂状態が生まれ
たというだけではない。その分裂の間隙をぬ
って、言語のく中間体への領域に、フランス
語が大量に侵入してきたことが、重大な問題
なのである。

フランス語作品からの翻訳をつうじた、フ
ランス語法 (francesismi) の浸透なる、すでに
17世紀後半から見られた現象であり、クルス
カ派がしばしば非難していたものだった。し

かし、18世紀の現象は、それとは、量的にも
質的にも、まったくことなる。たしかに、翻
訳書の数が、爆発的に増えたことは事実であ
るが、それよりも重大なのは、フランスの文
化様式そのものが、はいりこんできたことで
ある。文学や芸術といった分野だけでなく、
ロココ趣味とともに、衣服、調度品、化粧、
料理など、ブルジョワジーの生活にかかわる
事物が入るに応じて、大量の語彙が導入され
た。また、交通機関や軍隊の用語などにまで

それはおよび、さらには、行政言語、法律言語にまでフランス語の影響が、顕著にみられた。そして、語彙だけの問題ではない。慣用語、意味的カルク、統辞法から文体にいたるまで、フランス語様式が、浸透していったのである。

このような事態をさして、デヴオートは、かつてのラテン語と俗語とのそれにかわる。フランス語とイタリア語——より正確に言うならく方言——との「あらたな二言語使用」

(1) Devoto, Giacomo, Profilo di storia linguistica italiana, Firenze, 1953
Cap. VII. Il nuovo bilinguismo

が生まれたというが、それは誇張ではない。⁽¹⁾ 文学者や知識人にとって、フランス語で書くことは、べつに異常なことではなかった。ゴルドーニは、演劇、それも日常生活の微妙な描写をひつようとする喜劇を、フランス語で書くことができたほどである。のちのマングーニの場合に端的にあらわれるように、フランス語は、あるときには、イタリア語よりもずっとく自然な「ことば」でさえあった。そして、社会の上層階級にも、フランス語の使用

(1) Cesarotti, Melchiorre, Saggio sulla filosofia delle lingue (1785), Milano, 1969, p. 83.

は、一般的となっていた。チエザロッチェは書いている。「フランス語は、いまや、イタリア全体で共通のことばだ。すべしでも教育を受けた者で、フランス語になじんでいないか、身につけてしまっていないような者はいない。社交界の男女の書架には、フランス語のものしかない」⁽¹⁾あのカザノヴァの『回想録』は、フランス語で書かれていることを思いおこせば十分だろう。

たしかに、18世紀は、フランスの言語と文

(1) Caraccioli, Domenico, Paris, le modèle des nations étrangères, ou l'Europe française, 1777

Cf. Réau, Louis, L'Europe française. Paris, 1938. p. 9-10. p. 36-37.

化が、全ヨーロッパに浸透していった時代、
くフランス的ヨーロッパの世紀である。しかし、この『フランス的ヨーロッパ』というそのものずばりの題名をかかげた著作を書いたのは、フランス人ではなく、ナポリ王国の外交官カラッチョーリなのである。⁽¹⁾

けれども、ここで論じたいのは、このような言語そのもの、あるいは言語使用の次元へのフランス語の浸透についてではない。それと密接にむすびついたかたちで、ひとつの

新しい言語意識が生まれでてきたということ
 が、重要なのである。そのきっかけをあたえ
 たのが、フランスからの啓蒙主義の移入であ
 った。

啓蒙主義とは、べつに、ひとつの確固とし
 た体系をそなえた思考様式ではなく、社会的
 現実にたいして、あらたな知的態度をとるこ
 とをもとめる、思考のスタイルである。啓蒙
 主義の特色は、知識領域の拡大の問題と、そ
 の知識の社会全体への普及の問題とを、密接

に結びつけたことにある。そこでは、知識そ
 のもの、そして、知識人のありかたが、社会
 的性格を帯びるのである。〈真なるもの〉は
 〈有用なもの〉であり、知識人は、教育者で
 あり、ジャーナリストでもあった。このふた
 つは、どちらも、クルスカ・アカデミーに代
 表されるような、少数の学者のみに排他的に
 所有される文学者古典の教養を至上のものと
 みる、イタリアの伝統的文化様式と、はげし
 く対立することになる。だから、〈言語問題〉

もその枠組のなかにあった、修辭的古典主義文化の価値観を、破壊する役割を演じたのは、まず、啓蒙主義である。そして、その場合、ワルスカ的純粹主義に対する新語、借用とくにフランス語法のうけいれという言語の問題が、そのまま、伝統文化に対する革新の要求という、文化全体の問題となつてあらわれるのである。ともあれ、啓蒙主義が、言語にたいしてつきつけた問題は、つぎのようにまとめられるだろう。

・社会的伝達手段としての言語

言語は、社会のなかで、觀念の伝達をはたすための手段、交流 (commercio) の道具である。だから、重要なのは、言語そのものではなく、言語が伝えるべき内容である。社会的必要 (bisogno) をみたす有用な知識を、できるかぎり多数の者にむけて、伝達することが言語の第一の役割である。言語のもつべき性格は、形式性、修辭性でなく、伝達性、社会性である。したがって、言語にたいする古

典の權威は、廢止されるか、少なくとも縮

少しなくてはならない。

・知識の拡大と語彙の増化

人間精神の進歩は、あらたな知識を獲得し

ていくことで、おしすすめられる。知識は、

言語によって、はじめて、認識され、伝達さ

れるのだから、知識の拡大は、当然、語彙の

増大を要求する。認識をして言語をく豊かに

する (arricchire) ためなら、派生語、造語、

借用など、手段はなんであれ、それにためら

(1) 言語の進歩は、あくまで、合理的知識に見合うものであるから、表現には一義性
が要求される。ここから、語彙構成、文法体系のく合理化の要求が生まれる。
ただし、この要求は、イタリアでは、フランスほど、主要なものとはならない。

うべきではない。したがって、過去の言語の

状態をしめすだけのクルスカ辞書には、した

がう必要がないし、辞書そのものをつくりか

えねばならない。この言語進歩観こそ、古典

の言語をく保存するの事を願う、クルスカ

の復古主義と全面的に対立するものである。⁽¹⁾

[ここからでてくる系として、人文主義的

教養の外にある、自然、社会を対象とする科

学の分野での専門用語の問題が、切実なもの

になってくるのだが、ここではあまり論じら

(1) これは、ひとは、まったく新しい知識領域での用語の創出は、ひとは、用語の使用の統一化にかかわる。さらに、科学用語から一般慣用への転移も重要な問題である。この点、その社会的影響力のこともあり、見のがれえないのは、重農主義者による「経済学」である。

cf. Folena, G., Lombardismi tecnici nella Consulte del Beccaria, in op. cit., p. 67-86. また、Il rinnovamento linguistico, in ibid. p. 39-55. も参照

れない。]

(1)

・近代的文章の創出

クルスカの保持する「模倣」の原理からみ

て、作家がならうべき文体は、ラテン語の統

辞法と総合文構成にもとづく「ボッカッチョ」的

文体であった。意味内容のまえに複雑な表現

形式がちふさがる、この修辭的文体は、分

析的思考を可能にし、解説を必要としないそ

くざの伝達をなしとげる近代的文章を望む啓

蒙主義にとって、文章表現のうえで、倒すべ

き第一の敵であった。形式的にみれば、文章構成の単純化、短縮化、複雑な従属節の廃棄、並列性、線条性という特徴をもつ、近代的文章形式が生まれつつあった。それは、イタリア語に欠けていた言語の「中間体」をつくりだすところみであると同時に、ボッカッチョ的文体からの思考の解放でもあった。

(1)

この点で、ひとつの模範となったのが、フランス語の分析的統辞法と文体であった。とくに、フランス語がもつとされる「自然語順

(ordre naturel) > は、倒置法を頻用するボツカ
 ッ4ヨ的文体の反措定として、^{しはしは}把握された。
 ここに、18世紀に特有の、自然語順と倒置法
 についての構文理論と、それをめぐる論争が
 からまりあうのだが、この点は、あまりくわ
 しく論じていらぬ。ただし、この構文論
 議は、フランスにおいてとことなり、イタリ
 アでは、実践的問題とむすびついていったこと
 に、注意すべきである。

・知識人と公衆

閉ざされた学者層にむけてではなく、社会
 のよりひろい公衆にむけて、科学的知識の流
 通、文化の普及をめざした知識人にとって、
 新しい媒体とな、たのが、新聞、雑誌などの
 定期刊行物であった。文化的基礎にたたく
 公論 (opinione pubblico) > を形成する^{eruditoではなくfilosofoとしての}ことが、知識
 人の重要な任務と考えられるようになった。
 もちろん、雑誌はこれまでもあった。しか
 し、文化的、科学的な giornale は、政治的意
 見、主張の発言の場としての gazzetta とは、は

1) Folena, G., *Il rinnovamento linguistico del Settecento italiano*, in Folena, op. cit., p. 17-18.

っきりと区別され、giornalistaにたいして、ga-

zzettiereは、侮蔑的な名称としてあつかわれた。⁽¹⁾

そして、知識人が語りかける文化的公衆が、

<国民(nazione)>として概念化されてくる。人

文主義的古典教養によってではなく、実証的

で有用な科学的知識によって育成され、社会

の文化的統合を可能にする公衆としての<国

民>が、言語体制の担い手として把握される。

だから、この時点での<国語(lingua nazionale)>

は、文化的公論の伝達と表現の手段としての

文化言語を意味する。<nazione>の概念は、か

つてのような人種的、風土的意味あいを捨て

たが、いまだ、19世紀におけるような政治的

意味をそれほどもってはいなかった。そうな

るのには、<nazione>と<patria>とが結びつかぬ

ばならなかった。<nazione>とは、ここでは、

一定の社会階層——ブルジョワジー——が形

成する文化的公衆をさすということには、注

意しなければならない。

それでは、一般論はこのくらいにして、少

しばかり、言語問題における啓蒙主義の
 位置を明らかにするような具体例をあげてみ
 よう。

まずあげべきは、1760年頃から、ミラノ
 において形成されつつあった、アレッサンド
 ロとピエトロのヴェッリ兄弟、チエーザレ・
 ベッカリーアを中心とした啓蒙主義者のグル
 ープである。ロンバルディアの百科全書派た
 らんとしたかれらは、1764年6月に、雑誌『

(1) 同年1764年に発刊されたのが、全ヨーロッパに反響をよびあこすことになる。
 ベッカリーアの『犯罪と刑罰』である。

カフェ(Caffè)』を創刊し、論陣をはった。終
 刊は1766年5月と、刊行期間はみじかかった
 が、かれらは、社会と文化の全面的改革にむ
 けて、法律学、経済学、農業学、博物史など
 についての論説を、そこに発表した。伝統的
 権威への反抗を旨とするくカフェグループ
 にとって、文学、言語の領域で、倒すべき第
 一の敵であったのは、もちろん、クルスカ・
 アカデミーである。その態度が、もっともよ
 くあらわれているのが、アレッサンドロ・ヴ

(1) 原題は、すし長く、Rinunzia avanti notaio degli autori del presente foglio periodico al Vocabolario della Crusca というもの。
Il Caffè, a cura di Giorgio Roverato, Treviso, 1975, p. 141-145. に収録。

エッリによる。みじかいがきわめて論争的な

論説「クルスカ辞書の放棄」(1764)である。
(1)

まず、ヴェッリは、「カフエフグループ」の

信条は、「ことばより観念を優先させる」こ

とだと言う。これこそ、クルスカの純粹主義

古典主義を窮地においやる言語観なのである。

人間精神にとって本質的なのは、「事物」の

認識、「観念」の把握であって、「ことば」

はそれを忠実に表現し伝達するための道具で

あるから、「ことば」そのものについての知

(1) これは、啓蒙主義が「文法」を軽視するということの意味しない。
ただ、それは、「理性」の文法、とくに一般文法というかたちをとる。
文法は、ことばそのものの規則というよりも、表象される観念間の合理的規則を扱うものとなる。「一般文法」は「観念学 idéologie」の一部をなすのである。

識は、二次的なものにとどまる、というのが

啓蒙主義の共通認識である。言語の修辭的規
(1)

則や古典作家の表現にしたがうことは、「思

考と理性の公正な自由に課せられる不正なわ

な」となるのである。こうして、ヴェッリは

クルスカ辞書に象徴される、「トスカナこと

ばの純粹さなるものを放棄」することを宣言

する。だが、ヴェッリの要求は、これまでク

ルスカに反対したものがとったような、^{1300年代}トス

カナ語以外のことばの正当性を主張するとい

った態度では現われぬ。むしろ、ヴェツリ
 が求めるのは、語彙の増大、拡大なのである。
 ヴェツリは、「新しくすぐれた語を發明す
 る能力」を自由に行使すべきだと言う。言
 語を「豊かにしすぐれたものにする」ことを
 おしとどめるのは、「不正な奴隷状態」をつ
 くることだ。どんな外国語であれ、それをイ
 タリア語化すること、知識が發展するのな
 ら、その語を借用するのにためらうべきでは
 ない。「語が觀念に仕えるのであって、觀念

が語に仕えるのではないから、われわれは、
 よい語があったなら、たとえ宇宙のかたすみ
 からでももってきたものだ。
 語彙の増大の要求は、これまでも、反クル
 スカ派が、しばしばとなえたものだった。け
 れども、それは、クルスカ辞書の掲載基準の
 緩和をもとめたのであって、クルスカの權威
 を全面的に否定するまでにはいたらなかった。
 いかなる反クルスカ派でも、文学伝統と古典
 的形式を顧慮せざるをえなかったのである。

ところが、ヴェッリの要求は、造語、借用の無条件の正当化をもとめることで、伝統的權威からの完全な断絶を、意識的におこなおうとしたのである。語彙の増化にもし条件があるとしても、それはただ、知識の進歩に貢献するなら、ということ、言語そのものに課せられた形式的規範は、ふきとんでしまった。これは前代未聞のことだった。重要なのは、文学伝統の保持ではなく、科学の発展であるという、この啓蒙主義的要求があればこそ、

ヴェッリの語彙の拡大の主張は、偶像破壊的なものになったのである。けれども、ヴェッリは「宇宙のかたすみから」でもと言うが、実際には、ひとつ国境のかなた、フランス語からの語彙の導入が、もっとも主要なものだった。だから、ヴェッリの主張は、18世紀に入って爆発的に増大したフランス語法 (francesismi) の全面的認容を意味したのであり、この点では、バレッティのような、反クルス^的改革派からも、批判される

u) Vitale, M., *Questione della lingua*. p. 267

ことになるのである。じじつ、このヴェツリ

(1)

のあまりに伝統無視の態度は、このさき、ひ

きつぐものがなかった。だが、語彙の問題は

これ以後の「言語問題」において、むしろ

に重要な役割をはたすことになる。そして、

そこでは、クルスカ辞書とフランス語法とい

うふたつの極が、立場をひきさきあうものと

なる。

最後に注意しておくべきは、ヴェツリが、

「レツジョ・ディ・カラブリアからアルプス

(1) ここで「教養人」というのは、クルスカの規範を支持する文学者のことではない。
それは、先にのべたようなく文化的公衆をさす。
だから、「colti」は、「dotti」に対立する概念である。
それは、ちょうど、「filosofo」が「erudito」に対立するのと同じだ。

までにいたる教養人 (uomini colti) によって理解

される言語」を、この雑誌「カフェ」では用

(1)

いると言っていることである。こうして、ト

リッシーノ的なく「lingua italiana」の理念が、「イ

タリア」の文化的公衆が形成する言語という

啓蒙主義的把握のなかに、かたちをかえなが

らもひきつがれていくのである。

「カフェ」が、少々行きすぎともいえる観

点を、反抗的身ぶりて提出したのにくらべて、

(1) Cesarotti, Melchiorre. Saggio sulla filosofia delle lingue
a cura di Mario Puppo, Milano, 1969.

より理論的で、体系的な著作のなかで、く言語問題に重要な足跡をのこしたのが、メルキオーレ・チエザロツティである。チエザロツティの『言語哲学試論』(1785)⁽¹⁾は、構文論を中心とした文法理論、語源論、意味論、比喩論。さらに言語の genio 論にいたる啓蒙主義言語理論の総合とも言える著作であり、コンテ・ヤックの影響はみうけられるものの、独自の創的な観点に満ちあふれている。それらの点に関して、論ずべきことは多いのだが、こ

(1) ibid. p. 19.

こでは、く言語問題にかかわるところだけを、かんたんにふれておく。

『試論』第一部は、言語についての一般的理論的考察をあつかうが、それは、クルスカの復古的純粹主義にたいする、あからさまな異議申し立てを宿している。チエザロツティは、「言語の向上をいつもさまたげる意見」⁽¹⁾が、文学者のあつだにはびこっていると述べ、それをうちたおすために、つぎのような、ハットの言語史の哲学的原理をかかげる。

(1) ibid. p. 20-22.

1. いかなる言語も、もともと優雅でも野
 蛮でもない。 2. いかなる言語も純粹 (pura)
 ではない。 3. いかなる言語も、前もった計
 画によって形成されない。 4. いかなる言語
 も、私的あるいは公的な權威 (autorità) によっ
 て形成されない。 5. いかなる言語も完全で
 はない。 6. いかなる言語も、十分に豊かで
 はない。 7. いかなる言語も、不変ではない。
 8. いかなる言語も、国民によって統一的に
 話されない。

(1)

(1) ibid. p. 28.

こうして、純粹主義にもとづく、言語の靜
 態的、不変的モデルはうちくずされ、かわっ
 て、動態的、変動的な言語のすがたが、あら
 われる。チエザロッチィのこうした言語観を
 ささえるのは、つぎのふたつの認識であると
 言ってよいだろう。ひとつは、「言語の進歩
 は、つねに精神の進歩に比例する」という認
 識⁽¹⁾である。啓蒙主義における「進歩」は、た
 えざるく完成可能性 (perfettibilità) をさし、具体
 的には、人間の「交流」の増大が生み出す。

知識の拡大、科学技術の発展として、とらえ
られる。したがって、過去の文学言語に依拠
することは、精神の進歩を阻害し、言語を死
語にしてしまうことになる。また他方で、こ
の見方によれば、言語はそれ自体ではなんの
価値もなく、知識、認識にうらうちさされての
み、人間精神にとって本質的なものとなる。
したがって、純粹主義がかかげる、言語の形
式的モデルにしたがう必要は、まったくない。
啓蒙主義の説く、言語と精神の歩みの平行性

(1) *ibid.* p. 21

を強調する言語進歩観^{の出現}は、言語イデオロギー
の歴史において、じつに画期的なものなので
ある。
もうひとつ重要なのは、言語が「多数者の
自由な合意」⁽¹⁾によって形成されるという把握
である。少数の著作家の權威も、特定の一地
方の言語——トスカナ語——の慣用も、言語
を支配できないし、また、支配すべきでもな
い。この把握は、〈言語問題〉のなかの立場
でいうなら、チエザロッティを、〈italianista〉

- (1) 事実、チエザロッチイは、16世紀の「言語問題」においては、トリツシーら italianisti を支持
- (2) だから、基本的構図は、次のような三項対立となる している。Ebid. p. 101-102.

dotti — colti — plebeo (volgo)
 nazione — provincia
 esempio — ragione — uso
 scritto — parlato
 lumi

に近づけることとなる。チエザロッチイは、

この「多数者」を「国民」と同一視している

が、何回も言うように、それは「文化的公衆」

をさすのであって、「俗衆 plebeo, volgo」とは

あくまで区別されているのである。

ともあれ、動態性をそなえた言語にとって

造語、借用、比喻などの手段により、新たな

表現をかくとくしていくことは、その進歩を

おしすすめるものとなる。とくに、チエザロ

ッチイは、「ほかの言語とくらべて、われわれ

(1) ibid. p. 75

(2) ibid. p. 83

れの言語【イタリア語】は、精神の諸要求に

比して、まずしいものであるから、あたらし

い語で豊かになるひつようがある」と言う。

とりわけ問題となるフランス語からの借用に

ついて、チエザロッチイは、^{保守的}文学者の「ばか

げた愛国主義」を批判する。イタリア語には

その名称が欠けているが、必要な観念を表わ

すのにふさわしい語がフランス語にあり、そ

れを受け入れることで、イタリア語が豊かに

なるのなら、その語をしりぞけるべきではな

1) ibid.

い。だが、これは借用を無条件に許可するこ
とではない。一方で、チエガロツティは、「
わけもなしに、一日じゅう、イタリア語をフ
ランス語化している者たち」に、きびしい批
判をおくるのである。語は、それが表象する
観念、あるいはさし示す事物と対応してのみ
意味をもつのだから、語彙が貧困すぎても、
肥大化しすぎても、言語は形骸化する、とい
う認識が、チエガロツティにはあった。言語
を、著作家の〈権威〉 *autorità* からも、気まぐ

れなく慣用 *uso* からも、救いだし、〈理性〉
ragione と〈趣味〉 *gusto* の支配のもとにおくこ
とが、チエガロツティの願いであった。
しかし、それだけではない。あまりのフラ
ンス語法の氾濫は、ぎゃくに、イタリア語の
固有性の自覚につながることにもなる。もち
ろん、これは文学伝統の^{ひたすらな}保持を意味しない。
チエガロツティがもちだすのは、言語の *genio*
の理論である。 *genio* とは、ある言語が独自に
もつ固有の性格をさす。これは、啓蒙主義言

(1) チェザロッチイは、コンテジャックがこの区別をおこたったことを批判している。
ibid. p. 92.

論において、もっともよく論じられたテーマ
のひとつなのであるが、チェザロッチイの独
創的なところは、^{言語の}genioには、文法的genioと修
辞的genioの二種類があるとしたことである。
⁽¹⁾
文法的genioとは、その言語に内在的にそなわ
る文法形式をさし、これはほとんど変化しな
い。修辞的genioとは、その言語を話す国民の
感覚や判断の^{一般}の様式が作りあげたもので、時
代の精神にしたがって移りかわるものとされ
る。ある意味では、これは、言語と文体の区

別に対応するものとされる。チェザロッチイ
は、この修辞的genioという概念をたてること
で、歴史の変容性の契機をもちつつも、固有
の同一性を保ちつづける個別言語のありかた
をとらえようとした。こうして、クカフエフ
のように、伝統性の全面的な廃棄ではなく、
現在をささえるものとしての伝統を維持しな
がら、精神の進歩にもとづいて、言語に漸進
的改革をほどこすことが、問題とされるので
ある。チェザロッチイによれば、言語の修辞

(1) ibid. p. 93.

的 genio は、「国民の genio の表現」であつた。
(1)
 そして、チエザロツティは、こうした理論
 的研究をおこなつただけではない。「言語は
 国民 nazione のものである。言語にかんする新
 たなことは、公的合意による承認をえなければ
 ならない」として、フィレンツェに、かつ
(2)
 てのクルスカ・アカデミーにかわる。「国民
 評議会 Consiglio nazionale」をおくことを提唱す
 るのである。この評議会は、「盲目的信仰」
 ではなく「理性的従順」を要求し、「思いち

がえた愛国主義」ではなく「国民的名誉」を
 内にもちつつ、各地の主要都市に「地方評議
 会」をしたがえて、言語にかかわるあらゆる
 作業をとりおこなうとされる。チエザロツテ
 ィが要求する任務には、つぎのようなものが
 ある。他言語との比較によるイタリア語の起
 源の研究。語源の探索。方言辞書の作成。古
 典作家。さらに、クルスカが排した作家の検
 討。解釈。「国語の豊かさ」を知らせるため
 、科学、技術、職業のそれぞれの分野の語彙

(1) *ibid.* p. 113-119.

集の作成。他言語との語彙の比較（「gustoの形而上学」）。辞書の作成。これは二種類あり、ひとつは「言語を研究する」ための文献学的（ここではすべての方言が対象となる）歴史的辞書、もうひとつは、書きことばの「日常的使用」のための辞書である。さらに、外国語作家の翻訳、文学作品の分析研究がある。このように、クルスカがおこなったこと(1)にくらべれば、視野はかくだんに広がったと同時に微細になってきていることがわかる。また、言語の規範設定と、言語の理論的科学

的研究とが、平行するものとしてとらえられていいることは、注目すべきである。
『言語哲学試論』と銘うたれた著作に、このような実践的プログラムが、はさみこまれていいることは、異様にさえ見える。しかし、これは、理論家チエザロツティが夢見た、たんなる未来図ではない。というのは、この『試論』初版が発表される二年前、1783年には、多くの知識人の反対をおしきり、トスカナ大公ピエトロ・レオポルドによって、クルスカ

(1) *ibid.* p. 113.

は、解散させられていたからである。このト
スカナ大公レオホルドは、のちに兄ヨーゼフ
二世をついで、オーストリア皇帝に就任する
までのあいだ、啓蒙主義者を登用して、政治
(1790年)
経済の分野で改革的政策をおしすすめていた
が、ある意味で、クルスカ解散は、その一環
であった。チエザロツティは、「国民評議会」
が「啓蒙君主」のもとにおかれるとしてい
る(1)
が、その「啓蒙君主」とは、このレオホルド
のことである。だから、チエザロツティは、

ある程度の実現の期待をこめて、このような
計画を提案したと考えられるのだ。

ここには、言語研究のプログラムがあるだ
けではない。かつてない歴史的好機をとらえ
た啓蒙主義が、その理論的原理にもとづいて
構築した、あらたな言語体制のプログラムが
あるのだ。それは、もはや、復古的純粹主義
にはもとづかない。支配するのは、「理性」
と「趣味」である。こうして、かつての「古
典」の体制にかわり、「國語」の体制があ

われる。言語という現象のあらゆる局面が、

(規範にとっても、科学にとっても)

↓注目にあたいするようになる。この体制をさ

さえるのは、言語にたいする視野の拡大とま

なざしの微細化、そして、規範と科学の平行

性という、ふたつの知性の政治学である。

けれども、注意すべきことがある。チェザ

ロッティの言う〈国語 lingua nazionale〉は、けっ

して、書きことばの領域から出ることがない

ということだ。「書きことばは、基礎に慣用

(uso)、忠告者に〔作家の〕模範 (esempio)、指

(1) *ibid.* p. 28 (2) *ibid.* p. 26 チェザロッティは、「言語はまず話され、つぎに書かれる」(p. 79)ことをみとめている。けれども、「書」は「話」の完成体としてとらえられるのである (p. 25)。

(3) *ibid.* p. 71 (4) *ibid.* p. 103. この部分は、ダンテの *lingua auca (= volgare illustre)* の概念が論いられているところである。

(5) *ibid.* p. 118

導者に理性 (*ragione*) をもたねばならない」の

(1)

であって、「民衆 (*popolo*) の卑俗な慣用 (*uso vol-*

gare) から、ぜったいに法をうけとってはなら

ない」のである。さらに、書きことばは、「

(2)

さまざまな地方の教養人 (*uomini colti*) の精華に

よって構成される国民」のものであって、「

(3)

無学なものには説明が要る」ような言語であ

っても、そこから「国民性 *nazionalità*」は失わ

れないのである。したがって、「国語」は、

(4)

あくまで、「啓蒙化された公衆」の文化言語

(5)

のことであり、そして、そのようなものとして自覚的にとらえられているのである。

〈国語〉の概念を提示しながらも、チェザロッチェイが、のちのマンゾーニと決定的にことなるのは、この点なのである。チェザロッチェイの言う「日常的使用」のための辞書が、書きことばのためのものであることに注意すべきである（マンゾーニとの対比）。チェザロッチェイは、話しことばの次元での言語の統一化、単一化の意志をもっていない。という

より、そのようなことは、考えもつかなかつたのである。さらに、チェザロッチェイは、文化言語の次元のことであつたにせよ、言語統一を前提するものとしても、要求するものとしても、イタリアの政治的統一のことには、ひとこともふれていないのだ。

〈国語〉から〈民衆〉はあらかじめ排除されている。だが、それは、〈国語〉が、ひとつの政治体制のもとであらゆる人間が画一的に話すべき言語、としてはとらえられていな

(1) そのマルクマールは、義務的公教育制度と徴兵制である。

いことの裏がえしの表現なのである。そうと
 らえられるためには、国民という概念が
 より政治化しなくてはならないだろう。た
 なるく文化的公衆としてではなく、社会空
 間全体を同質化し、ひとつの政治的価値の
 とに融合するような、精神的統合体として、
国民が把握されなくてはならないだろう。
 そのとき、ひとは、民衆が有用で活用す
 べき人的資源として国民になりうること
 を発見するにいたるであろう。

(1)

2. 純粹主義と啓蒙古典主義

クルスカ・アカデミーが、1783年に廃止さ
 れ、フィレンツェ・アカデミーのなかに解消
 してしまったことは、うえで述べたとおりで
 ある。そのことは、アルフィエリをはじめと
 する多くの文学者、知識人の嘆きのまよにな
 ったものである。しかし、イタリア語の純粹
 性をまもるべき牙城としてのクルスカが復活

したとき、それは、けっして、イタリアの保守的文学者たちのちからによるものではなかった。クルスカを復活させてくれたのは、ほかならぬ、ナポレオン＝ボナパルトだったのである。

ナポレオンは、1808年9月2日の勅令で、現在のフィレンツェ・アカデミーを、三つの部門にわけ、そのうちのひとつに、「イタリア語の純粹性の保存」のためのクルスカ学会をおてることを命じた。さらに、これに付随

するようなかたちで、翌1809年4月9日の法令では、トスカナにおいて、法廷、公私の証書類に、フランス語とならんで、イタリア語を用いること、そして、「イタリア語をその純粹さのままに保つことに^{もっとも}貢献した」著作の著者に年間賞を授与することが、さだめられた。この法令の前言では、「トスカナ諸県の住民は……もっとも完全なイタリアの方言を話す」こと、そして、「この優雅で肥沃な言語を、その純粹さのままに保ちつづける」こ

(17) Parodi, Severina, Quattro secoli di Crusca, Firenze, 1983,
p. 123-125. これらの法令は、ここに再録されている。

とは、帝国の栄光にとって重要であることが
うたわれている。最終的に、クルスカが自律
した機関になるのは、「かつてのクルスカ・
アカデミーが再建されること」を命じた。18
11年1月19日の法令によってである。

このことは、19世紀前半の言語純粹主義の
運命に、複雑な影をおとすことになる。一般
的に言って、純粹主義の同一性は、何を主張
するかよりも、何に反対しているのかによっ
て、見きわめられるのだが、当時の純粹主義

に共通する基盤のひとつは、反フランスの態
度であった。フランス語法の浸透に象徴され
る。フランス語のイタリア語への影響の増大
そして、それと結びつくものとして、改革的
啓蒙主義の進出、これらのことから、イタリ
アの言語、文学の古典的伝統を守ることに、
純粹主義の志向となっていた。ところが、フ
ランスの統治制度を導入し、イタリアを強権
的に支配したナポレオン体制のもとで、クル
スカが復活させられたというのだから、話は

ややこしくなる。

だから、19世紀前半において、注目にあた
いするような、強烈な純粹主義の声は、クル
スカのそとで、ときにはクルスカとはまった
く無関係に発せられることは、偶然ではない
のである。もちろん、クルスカを否定する純
粹主義などというのは、完全な形容矛盾であ
るから、そのばあいでも、クルスカを支持す
る態度には、かわりがない。けれども、その
一方で、同時代のトスカナ文学者をも批判し

現在におけるトスカナの優越性を否定するよ
うな要素が、そこにくわわってくるのである。
ある意味では、19世紀前半の純粹主義者ほ
ど、徹底的な過去への回帰を説いたものは、
ほかにはない。けれども、そのとき、歴史的
時間と断絶した。1300年代トスカナ語の神話
が、ロマン主義的色彩をおび、さらに、愛国
主義(patriotismo)と結びつくようになるのであ
る。守るべき言語の純粹性が、せまい意味で
の文学伝統の問題としてではなく、〈国民〉

の精神的伝統を象徴するものとして把握されるのである。修辭的、理念的な次元で語られることが多いとは言え、純粹主義と愛國主義との結合は、19世紀前半のひとつの事件であったことには、かわりがない。

ヴェローナの文学者アントニオ・チエーザリは、いまだクルスカが再建されていなかった1806年から1811年にかけて、『クルスカ辞書』を、ほぼ独力で再編集し、さらに、多く

の語彙、語釈をつけくわえて、刊行した。この大作業をささえたのは、サルヴァトーティの純粹主義^{の理念}を現代に再生させようとした、かれの意志である。そのチエーザリの言語観は、『イタリヤ語の現在の状態について』(1808)のなかに、十全にあらわれている。チエーザリによれば、1300年代のトスカナ語は、それにはまさるものがないほどの「優美さ、純粹さ、雅びさ、固有性」をもっているというのだが、その中味は、こう説明される。「1300年代と

(1) Vitale, M., op. cit., Antologia, p. 707

いう聖らかな時代において、すべてのものが
 すばらしく話し書いそいで、いた。商人の会計簿、税関
 の主人、税務署やあらゆる工場の証書が、お
 なじ黄金をもたらし(1)ていた。つまり、チエー
 ザリの崇拜する1300年代トスカナ語は、文学
 語のかたちをとっているものではなく、だれ
 もが話していたことばのありのままのすがた
 のことである。じじつ、チエーザリは、その
 言語の純粹さは、く三冠トスカナよりもむしろ、文
 学的意図と修辭的形式をもたない、商人や聖

(1) Timpanaro, Sebastiano, Aspetti e figure della cultura ottocentesca, Pisa, 1980, p. 151-159.

職者の著作のほうに、はっきりとあらわれて
 いると考えた。チエーザリの言うく純粹性(2)
 とは、く文学性(2)のことではない。それはく
 自然性(2)とひとしいものなのである。
 したがって、ベンボ主義にもとづく、1500
 年代の文学語の価値は否定される。「言語の
 純粹さと優雅さにたいして、^は深い博識も、広
 い学識も、明敏な才能も、なにものにもなら
 ない」とチエーザリは言う。「言語の清らか
 さ、生まれながらの優美さ、素朴な純粹さ、

(1) Vitale, M., op. cit., p. 708

まれに見る清明さは、1300年代以後、もはや
 現われない」のである。そのような言語の純
 粋性は、後世のトスカナ人自身によっても、
 ないがしろにされている、とチエーザリは考
 える。したがって、「ことばの自然の純潔」
 は、「トスカナ語の黄金時代」、1300年代の
 言語からのみひきだしうるのである。
 たしかに、チエーザリは、18世紀いろいろの
 啓蒙主義にもとづく言語の近代的改革の波に
 対抗して、古典伝統を保持し、〈模倣〉の原

理を守ろうとしたのである。チエーザリは、
 1300年代トスカナ語にはなにも付け加えるひ
 つようがなく、造語や専門用語でさえ、それ
 を再活用すれば十分であると考えたほどだ。
 さらに、チエーザリの言語観は、あくまで唯
 美主義的であって、「言語の美しさ」は、「
 定義できず、感じるしかないもの」「知リえ
 ないなにものか」であるとされるのである。
 けれども、チエーザリは、1300年代トスカナ
 語の純粋性が、〈民衆〉popoloによって担われ

(1) Dionisotti, Carlo, Per una storia della lingua italiana, in Geografia e storia della letteratura italiana, Torino, 1967, p. 121

これには Timpanaro の批判がある。Timpanaro, S., op. cit., p. 157

た。人為的装飾をふくまないく自然▷ natura
 のすがたをあらわしていったとすること、あ
 らたな局面をきりひらいた。1500年代の貴族
 的修辭的文学伝統をたちきったのは、啓蒙主
 義者でも、ロマン主義者でもなく、▷ 自然▷
▷ 民衆▷の価値を結びつけた純粹主義者で
 あるとデイオニソッティが言うのには、逆説
 をぬらった誇張がふくまれているにせよ、理
 念の次元においては、まったくのまちがいと
 言い切れないものをもっている。チエーザリ
 (1)

の1300年代トスカナ語への回帰という、一見
 古典主義的な主張が、▷ 失われた始原の世界
 への憧憬▷というロマン主義的色彩をもとま
 っていることからわかるように、チエーザ
 リには、いくつか矛盾した側面があるのであ
 る。

19世紀の純粹主義の矛盾性を、もっともよ
▷ あらわしているのが、ルイジ・アンジェロ
 一二の場合である。アンジェローニは、ブオ
 ナルローティなどととともに、ナポレオン体制

- (1) Ciccone, Stefania De Stefanis, La questione della lingua nei periodici letterari del primo '800, Firenze, 1971, p. 17
以下のアンジェローニの言語論は、1811年から1813年へかけての、ミラノの雑誌「Poligrafo」にあてた書簡からなる。
- (2) ibid. p. 18

打倒をめぐす。秘密結社を結成したこともあ
る。共和主義者、ジャコバン主義者であるが、
そのかれが、「われわれの言語のもっとも純
粋な黄金は、14世紀の不滅の作家たちの著作
のなかにある」と考える。純粋主義者であっ
⁽¹⁾
たのだ。共和的ジャコバン主義と復古的純粋
主義との奇妙な取りあわせが、そこにはある。
アンジェローニは、つねに純粋に話す「トス
カナのすばらしい民衆」をたたえるが、もは
⁽²⁾
や、その言語をトスカナ語とはよばず、イタ

- (1) ibid. p. 17 italianaではなく、italicaであることに注意。
- (2) ibid. p. 44

リア語と呼ぶ(anzi italica che toscana)。純粋主
⁽¹⁾
義がこれまで崇拝していたのは、あくまでく
トスカナ語であつたのだから、この態度は
注目すべきだ。アンジェローニにとって、言
語はく国民の精神的統合性をつくるもので
してとらえられるのである。「国民をおたが
いにひきつけあうきずなは、言語であるのだ
から、^{その}結び目のきずなを解いてしまつと、国
民が、ほとんど消え去つてしまつ」のである。
⁽²⁾
このく国民のきずなをつくるのが、1300年

(1) Vitale, M., op. cit., p. 379.

代トスカナ語の純粹性であったわけだ。こうして、アンジェローニは、チエーザリの態度を絶賛すると同時に、改新的要求をうけいれつつあった、クルスカ会員をもふくむフィレンツェ文学者たちを、きびしく批判するのである。ひいては、古典作家の研究にかかわるよりも、「言語を乳母と民衆から習う」べきだと主張するにいたる。だが、これは、現代的慣用、とくに借用、造語を嫌悪する態度と不可分に結びついたものであった。

もうひとりふれておくべき純粹主義者は、ナポリのバジリオ・ポオティである。ナポリは、17世紀のディ・カポア学派——ヴィーコもこの学派に属していたことがある——以来トスカナのもとでは、もっとも純粹主義の流れが強い土地であった。ポオティは、多くの1300年代の文献の編集をおこなひ、文法書、辞書、学習書を作成して、ひとつのポオティ学派ともいうべきものをつくりあげた。言語教義の面では、それほど斬新なところはなく、

117 Vitale, M., op. cit., p. 381-383.

— もっとも純粋主義に斬新なところなどあ
 るはずもないが —、1300年代を^{言語の}く金の時代^と
 と見なし、く模倣^フの原理を擁護したのにか
 わりはない。ただ、言語への現代的な要求には
 一定の譲歩をしたところと、く言語^フとく文
 体^フの次元を明確にわけ、く言語^フにおいて
 は1300年代がもっとも純粋としながらも、く
 文体^フの次元では、く模倣^フすべき作家の対
 象を、ほかの時代にもひろげたということ^く
 らいが、注意すべきところであるう。

(1)

けれども、フオティの重要性は、ほかのと
 ころにある。フオティ学派の解釈によれば、
 言語の純粋性の理念とくイタリア性 (italianità)^と
 の理念とが結びついて、その言語伝統、文学
 伝統のあゆみが、く国民^フの精神の発顕とな
 るのである。こうして、古典教育をつうじて
 純粋主義と愛国主義とが合体する。そして、
 フオティ学派が、ナポリ王国の学校体制に浸
 透し、教育界での支配的立場を手に入れたと
 き、こうした理念は、広範な文化的、政治的

影響力をおよぼすことになるのである。

当時、ナホリの一学生であったデ・サンクティスは、プロテイを回想した「最後の純粋主義者」というエッセイのなかで、こう言っている。「過去は、神学校、田舎教育と呼ばれ、進歩は、純粋主義、バジリオ・プロテイ学派と呼ばれていた。この聖なる名前を、ナホリ人は、つねに尊敬の念をもって、思い出すことであろう。それは若者たちがそのもとに結集する旗であった。この名前は、自由、

(1) De Sanctis, Francesco, L'ultimo de' puristi (1868), in Saggi Critici vol. 2, a cura di Luigi Russo, Bari, 1965, p. 249.

「最後の者」という表現からもわかるように、デ・サンクティスは、純粋主義を支持していたわけではない。むしろ、それに対して、きびしい批判を向けたのである。

学問、進歩、解放、神学校へのたたかい、いまだはつきりしてはいなかったが、あらたな考え、あらたな文明への希求を、意味していた。純粋主義は、1860年に完結したこの偉大なドラマの第一幕であった。」

⁽¹⁾若き日の思い出につまとう美化や、イタリヤ統一直後の高揚した雰囲気はここには混ざっているとしても、それをさしひいても、この証言は貴重である。というのは、リッルジメントをささえた精神的支柱のひとつであ

る愛国主義のみなもとが、純粹主義にあることを、その時代の舞台の登場人物が語っているからである。ここで行われている「進歩」
 「新しい文明」とは、決して、啓蒙主義的な意味内容をもつものではない。それは、「偉大なドラマ」、リソルジメントの真の主角
 「祖国」の觀念、「国民精神」の覺醒のことなのである。
 南部イタリアでは、プロテスタントの支配は根強くのこった。1867年に、ナポリの中等、

(1) Raicich, Marino. Scuola, cultura e politica da De Sanctis a Gentile, Pisa, 1981, p. 103. 視察官ラファエリ・マジの報告。このように、いちおうは、プロテスタントの貢獻が称賛されるのだが、そのおとすぐに、いまは、話しこぼしに近い書きこぼし⁽¹⁾がもたれられているのだから、1300年代文学の模倣はやめて、「われわれの学校も、トスカ方言の學習に向けるべき」であるとされる。(ibid. p. 104)

高等学校の状態について、ある視察官は、こういう報告をしている。作文のさいに、生徒たちは、1300年代文学を模倣して、ときには魅惑的である、優雅で洗練された文章を書く。「このような現象は、北部の学校ではまったくまれであるか、ぜんぜん見かけない。それは、プロテスタントの影響に帰すべきである。この学派の伝統は、幸運にも、南部諸州で、まだまったく消え去ってはいない」⁽¹⁾
 純粹主義が、それ以後も、長く影響力を保

(1) *ibid.* p. 108-113.

持しえたのは、学校の言語教育のなかで、修
 辞学が、主軸をしめ、もっとも価値あるもの
 とされていたからである。19世紀に出版され
 た修辞学の学習書は、1300年代を中心とする
 く古典に基礎をおく、純粹主義的なものが
 ほとんどであった。そして、そのなかで、作
 詩術 *versificazione* に代表される形式主義的規則
 の枠組のなかに、愛國主義的な内容をもりこ
 むことが、すすめられた。学校の行事や祭典
 においては、教師や生徒の作になる、そうし

(1) *ibid.* p. 132.

(2) *ibid.* p. 124-129. 引用は、p. 125-126からとった。

た英雄崇拜的な演説詩が、たびたび朗読され
 ていたのである。
 (1)
 したがって、啓蒙主義の改革性も、ロマン
 主義の反抗性も排撃して、古典主義にもとづ
 く教育をつうじ、伝統的価値への帰依をうえ
 つけることで、〈国民〉精神を涵養すること
 を、純粹主義はめざしたのである。そのよい
 例として、1870年に、イシドロ・デル・ルン
 ゴが文部大臣にむけて送った、イタリア語教
 育のプログラムについての手紙を挙げよう。
 (2)

デル・ルンゴによれば、教育のもっとも重要
 な役割は、中等・高等学校の生徒たちに、「
 われわれの言語のもつ黄金、完全に純粋なも
 の」を知らしめることである。学校は、「わ
 れわれの言語の純粋性の復興者」となるべき
 であるから、そこでは古典の学習が、第一の
 基礎となる。純粋主義者の「国民文化への功
 績」は、不正にも認められていない。「イタ
 リアが、その国民性(nazionalità)のしるしのう
 ちに、言語をも持っていることを思い出した

のは、チエーザリ、プロティ、ロマーニヤ学
 派の博識のおかげなのである」。18世紀は、言
 語と文学が墮落した時代であるが、それは、
 「過去の偉大な伝統」がないがしろにされた
 からである。デル・ルンゴは、それは啓蒙主
 義とフランス文化のせいだと言いたいのだろ
 う。そして、いまや、ことばと思考に、まず
 まず「自由」がはびこりつつあるが、古典学
 習によって「そこを通り過ぎるのに必要なち
 から」を得なければ、それはますます「危険

な」ものになるだろう。と言うのである。

古典教育による愛国主義という奇妙な代物

を生み出した純粹主義は、ある意味で、19世

紀の政治的保守主義がもとめていた言語教義

なのである。

(1) この概念については、Timpanaro, Sebastiano, *Classicismo e illuminismo nell'Ottocento italiano*, Pisa, 1969², とくに Introduzione, p. 1~40

啓蒙古典主義 (il illuminismo illuminista) とは、⁽¹⁾

一見、不自然な呼び名のように見える。く古

典の価値を永遠化し、そのモデルにもとづ

いて、言語と文化に静態的形式をあたえよう

とする古典主義と、く理性の指令にしたが

って、知識の増大と社会的交流の拡大をつう

じて、く精神の進歩を押しすすめようとする

啓蒙主義とが、全面的に衝突する一面をも

っていることは、くカフェの例からでも、

あきらかである。しかし、啓蒙主義のなかに

は、過去との徹底的な断絶をはかるのではなく、一定の伝統的遺産のちからをみとめつつ、合理的漸進的改革をめざすという、ケエザロツティのような、方向づけもあった（政治的にいえば、啓蒙君主制によるく上からへの改革ということになる）。これには、近代的改革へのはげしい要求が、ともすれば、外国文化、とくにフランスへの全面的追随——言語の次元では、フランス語法の許容——と同一視されてしまう危険があつた。たということも、

一因となつていゝるだろう。

啓蒙古典主義は、そのような方向を、積極的に押しすすめるようとした思想潮流である。

古典は、永遠の価値のモデルとしてとらえられず、歴史的相のもとにおかれ、過去と現在との相対性がみとめられる。伝統は、拒否すべきものではなく、近代的改革の基礎、あるいは、その有効な指針として把握される。論者によって重さのおきかたはさまざま異なるが、古典と近代との統一が、めざ

されたわけである。そのとき、それを媒介する重要な役割をはたしたのが、〈国民 nazione〉の概念である。〈国民〉の固有性を保持しつつ、社会全体へむけての知識の普及、拡大をめざすことが、改革の目的となる。

〈言語問題〉の次元でいえば、〈国民〉の〈共通語〉を確立することが、めざされる。国民全体に共通に理解される言語、〈lingua italiana〉の実現が、啓蒙古典主義の一貫したテーマとなる。それは、ある意味で、啓蒙主

義的価値感にたっ たうえでの〈italianista〉の立場の復興とも、言えるのである。したがって、クルスカ的純粹主義——ただし、クルスカはそのころ穩健化していたから、ときには、直接の敵対者は、チエーザリとなる——は、断然こばまれる。古典崇拜にもとづく復古主義が、近代的改革をはばむものとされたのはもちろんであるけれども、注意しなければならぬのは、クルスカが、さらには、現代慣用の調停をはかるトスカナ主義さえ、〈共通

語の確立のためには、打倒しなければなら
 ない。地方主義 (municipalismo) のひとつの象徴
 としてとらえられたということである。近代
 的知識の社会への浸透は、く共通語の普及
 によってのみ可能であり、それこそく国民の
 言語となるべきであると考え、啓蒙古典主
 義にとっては、したがって、偏狭な地方主義
 の打倒という同じ地点から、クルスカへの批
 判と、方言への批判とが、同時におこなう
 るものとなるのである。

もうひとつ指摘しておきたいのは、啓蒙古
 典主義の地理的拠点が、北イタリア、とくに
 ロンバルディアにあったということである。
 オーストリア領にくみいれられ、ヨーゼフ二
 世の啓蒙君主改革を受け入れていたロンバ
 ルディアには、上からの穏健な社会改革をめ
 ざす啓蒙思想を發展させる有利な条件があっ
 たと言えるかもしれない（もちろん、時代が
 おすむにしたがい、反オーストリア、反君主
 制の契機が強まっていく。たとえば、カッパ

(1) Ciccone, Stefania de Stefanis, op. cit., p. 62 - p. 73 を参照。

ネオ)。そして、このロンバルディアとトスカナとの対立は、これ以後の文化状況に、ひじょうな意味をもってくるのである。

古典主義詩人として知られていた、ヴィンチエンツォ・モンティは、1813^{とその翌年}年、ミラノの雑誌「Poligrafo」に、はげしいチエーザリ批判をふくむ対話篇を発表した。モンティは、そこで、あのトリッシーノとおなじように、ダンテの「*volgare illustre*」の概念にたよりながら

(1) ibid. p. 65.

「イタリア共通語 *Lingua Universale Italiana*」の理念をあきらかにした。それは、地方的性格のあとをもとめない、イタリア全体に共通の語彙（*vocaboli illustri*）によってつくられる文学共通語としてとらえられた。したがって、そこでは、トスカナ語の優位性は否定されるが、その一方で、文学者に共有された古典主義的
理念は、保持される。「乳母も、フルスカも、自然も、なんの特権をもたない言語 学習がゆいいつの教師である言語」が、モンティの

u) ibid. p. 68.

理想となる。「古典作家の模範」「アナロジ
ー」「良き慣用」の三つの支柱でなりたつ
が、言語であるとされる(もともと、これは
チエガロツティの焼きなおしだが)。このよ
うな立場から、モンティは、チエーザリが、
その改訂クルスカ辞書において、古語と現代
語との区別を設けずに、「われわれの言語の
生きた宝のなかに、すたれて死んだ語彙が入
りこむ」のをみとめてしまったと批判する。
(1)
そして、チエーザリ、さらにアンジェローニ

の純粹主義を、きびしく非難していくのであ
る。だが、モンティの眼目は、クルスカ辞書
の權威性そのものを否定せず、チエーザリの
語彙の選択基準を批判することにあつた。じ
じつ、モンティは、辞書改革にむけての12項
目の提案をかかげて、クルスカにその実行を
よびかけているのである。
しかし、その期待はうらぎられる。このの
ち、ミラノのイタリア科学文学芸術学会の一
員となつたモンティは、^{1816年}辞書改革のために、

フルスカとの連携を、学会に申し出る。ところが、フルスカ側から、その申し出は拒絶されてしまうのである。こうして、モンティは、独自の立場から、何人かの著者との協力をもとに、1817年から24年にかけて、『フルスカ辞書へのいくつかの訂正と追加の提案』を刊行していくのである。(全四巻、七分冊)

この『提案』によって、モンティがうちたてようとした言語規範は、「哲学の方法によって秩序づけられ、あらゆるけがれがぬぐい

(1) Migliorini, Bruno, Storia della lingua italiana, p. 607

さられ、国民の合意により批准された語彙」⁽¹⁾からなる <italiano illustre>、イタリア共通語であった。そして、ここでは、決然として、フルスカの権威が否定される。フルスカ会員は「イタリア語はトスカナだけのもの」と考えているが、トスカナ語は、特殊語法 (idiomatici) に満ち、トスカナの外ではだれも話さず理解しない。「イタリアの共通のこぼきを、トスカナ方言の専制のもとで特殊な言語の悲惨な状態にひきもどすこと」が、「フルスカ

- (1) *ibid.*
- (2) あのマツツイニは、モンティが没したとき(1828)、「言語における専制に、決定的な崩壊をもたらした『提案』の著者」と評した。 *ibid.* p. 608.

辞書の野心にみちた陰謀」なのである。

(1)

したがって、この歴史的な『提案』は、これ

までクルスカが排除してきたことばの、大が

かりな復権作業なのである。クルスカのした

がう原則を、ことばのうえで批判するだけで

なく、クルスカの權威に拮抗し、さらにそれ

をくつがえそうという意図をもって、これほ

どの実践作業がおこなわれたことは、いまだ

かつてなかった。こうして、ここには、非ト

(2)

スカナ作家、現代作家の語彙から、科学言語

専門用語までが、その対象となる。とくに、

科学言語は、精神の進歩をあらわし、文化の

普及をうながすものとして重要視される。

しかし、「追加と訂正」という言いかたか

らもわかるように、モンティは、クルスカが

あらわしてきたような、言語における制度的

權威性そのものを、否定しようとはしなかつ

た。だから、思考と表現の自由を主張したロ

マン主義者、ディ・グレーナから、モンティ

の態度はまだ手ぬるいと、きびしく批判され

(1) Ciccone, S., op. cit., p. 129-130

ることにもなる。ある点で、モンテイは、純

(1)

粋主義者たちと共通する。言語の古典的形式

性と純粋性の理念さえ、いだいていた。

というのち、モンテイの言うく共通語 lingua

comuneは、イタリア全土の知識人にわかれも

たれる文化言語。く自然にによってではなく、

く学習によって身につけられることばだから

らである。したがって、モンテイは、復古主

義者の古拙語法 (arcaismi) を排撃するとともに

方言的地方語法 (provincialismi) をも非難するこ

(1) Ciccone, S., op. cit., p. 83.

とになる。クルスカがなぜ批判されねばなら

ないかという、それは、クルスカが「共通

語を方言 — トスカナ語であれ方言にはちが

いない — にひきもどす」からなのだ。ベッ

のところで、モンテイは、「個々の方言への

熱狂」に反対して、「イタリア共通語の学習」

を読者にすすめている。モンテイによれば、

方言は「くにの外では通用しない貨幣」なの

(1)

である。

ともあれ、このようにしてく共通イタリア

語 *lingua italiana comune* の理念が、前面におしだ
 されてくる。モンティは、この理念を正当化
 するために、ダンテの *<volgare illustre>* の概念を
 援用したのだが、この点で、より先まで行っ
 たのは、『提案』にも参加した、ペルティカ
 リである。ペルティカリは、*<volgare illustre>* を
 歴史的に実在した言語であるとみなす。それ
 は、各地の方言に分裂する以前の *<ローマ共
 通語 romano comune>* にみなもとをもち、それが
 文学者たちの権用に守られて、いまの *<イタ*

(1) Vitale, M., op. cit., p. 394-395.

リア共通語>になったといっているのである。つま
 り、*<italiano comune>* は、トスカナ語が生まれ
 る以前から存在し、ローマに直接むすびつく
 伝統をもつ言語だとされるのだ。

これでは、トスカナ語の權威性、伝統性を
 誇りに思う、トスカナ文学者たちからの反発
 が来るのも当然である。じじつ、この『提案』
 をめぐって、ミラノとフィレンツェの文学者
 知識人のあいだで——制度的に見れば、前者
 の科学文芸学院と後者のフルスカとの対立——

(1) ジョルダニについては、Timpanaro のつぎの2論文がくわしい。

Timpanaro, S., *Le idee di Pietro Giordani*, in *Classicismo e illuminismo nell'Ottocento italiano*, Pisa, 1969², p. 41-118

Id., *Il Giordani e la questione della lingua*, in *Aspetti e figure della cultura ottocentesca*, Pisa, 1980, p. 147-224

一、それぞれの立場の正当性をめぐって、は
 てしない論争が生まれることになる。それは
 ある面から生えれば、ロンバルディアとトスカ
 ナの文化的ヘゲモニーをめぐり一大論戦でも
 あったのだ。

けれども、両者の自己固執のぶつかりあい
 にあきあきして、中間的立場をとる者も多か
 った。その代表とも言えるのが、ピエトロ・
 ジョルダニ⁽¹⁾ である。ジョルダニは、1300
 年代トスカナ語が、言語の<純粹性>の状態

をあらわしていることをみとめるが、<古典>
 の<模倣>という復古主義的立場は、拒否す
 る。その純粹性が失われたのは、ボッカッチ
 ョ、ベンボのような者が、人為的修辭性を言
 語にうえつけたからだとされる。そして、13
 00年代トスカナ語のもっていたような<自然
 性><單純性>をふたたび手にするには、コ
 ンディヤックの言う<觀念の連結>の原理に
 したがって、裝飾性のない、確固とした散文
 形式をつくりあげねばならないのである。言

れば、ジョルダニーは、古典主義を現代的に蘇生させ、啓蒙主義との綜合をはかったのだと言えよう。

そこで重要なのは、ジョルダニーが、く言語とく国民との分かちがたい結びつきを、強調した点だ。だが、それは、排他的愛國主義にもとづくのではない。く言語とく国民が、いっしょになって、歩んできた、歴史的形成力を明らかにすることが、ジョルダニーの目的であった。ジョルダニーは、けっ

きよく未完に終わることになるが、『言語の変遷からみた六百年にわたるイタリアの公共精神の歴史』という題の著作を計画していた。それについて、ジョルダニーは、ある手紙のなかで、こう言っている。「わたしは、1250年からはじめ、1800年まで達したい。言語とくいうものを、わたしは、国民のすべての慣習、積念、できごとが反映し、映しでる鏡というふうにかんがえている。……だから、言語のうつりかわりのなかに、550年にわたって、つき

(1) これは1811年の手紙。Timpanaro, S., *Aspetti e figure*, p. 206.
おなじような趣旨のことを、ジョルダニは、雑誌「Antologia」にのせた
一論文でも言っている。Ciccone, S., *op. cit.*, p. 186

つぎにおこったことのうっかりかわりのしるし
を見いだしたいのだ。それも、歴史のなかで
目立つ大事件だけではなく、きわめて身近で
ほとんど気がつかれないようなことをだ。

(1)

けれども、ジョルダニは、こうしてく言
語とく国民との結合を強調するのとおな
じ地点から、く方言を批判することになる。
く言語が、文明の進歩に対応して発展する
べきであるとすれば、く方言はそこから取
りのこされたく残存として把握されるよう

(1) Ciccone, S., *op. cit.*, p. 81

になる。この点で、ジョルダニは、モンテ
イの態度とぴったり合致してしまふ。ジョル
ダニは言っている。「方言を家庭内の使用
にのみとどめること、そして、^{あらゆる努力をもって、}国民共通語(

comune lingua nazionale) の実践を多数の者にひろ
め、便宜を与え、植えつけること、これは、
ほめられるべきわざである。」方言は、「文明
そして国民の名誉に適さないばかりか有害な
ことばであるが、^{方言}辞書を作成し、それをつう
じて、「共通語の知識と使用」にみちびくこ

(1) ibid. p. 82.

とで、民衆に、「すべてのイタリア人の共通
の祖国イタリア」の存在を知らしめることが
できるだろう。(1)とジョルダニは言う。

このような、モンティ、ジョルダニの方
言批判に、はげしく反発したのが、ミラノ語
文学者カルロ・ポルタである。ポルタは、ア
カデミー文学の空虚さに方言文学の真実性を
対置して、方言のもつ表現性、自発性を擁護
した。しかし、ポルタの顕揚する方言とは、
ヨーロッパにもひらかれ、ロンバルディアの

(1) Dell'Aquila, Michele, *Le piccole patrie e la grande patria,*
in Manzoni, *la ricerca della lingua*, Bari, 1984, p. 368-370

文化伝統を背後にもった、ミラノの近代的都
市方言なのである。
だから、つぎのことは注意すべきだ。⁽¹⁾ のちにもふれるように、当時、
方言は、「家庭内の使用」とどまっている
どころではなく、公的機能において、さらに
社会的威信においてさえも、ジョルダニの
言うく共通語フに、はるかに優越していたと
いうことである。そして、マンゾーニ理論に
よってあらわにされるように、く共通語フ自
体のすがたが、まったくあやふやなものであ

った。文学においても、方言は十全な表現媒体であって、内発性の欠いた趣味的方言文学さえ好評を博していた。マングーニの言いかたを借りれば、く方言は、自立したく言語であったのである。

ジョルダニの方言批判は、アカデミー文学者がおこなったような審美的、文学的基準にもとづくものではなく、政治的、文化的立場からのものだった。のちに、分権主義者カッタネオでさえ、方言文学の育成と方言の言

(1) Timpanaro, S., *Classicismo e illuminismo*, p. 283

語学的、歴史学的研究の必要性をうったえながらも、方言からく共通語への移行こそ必然であるとみなし、方言を地方的閉鎖性のあ^{の専一的使用}らわれとして批判せざるをえなかった。けれども、かれらは、いまだ啓蒙主義的文化主義の枠内にとどまっていた。「言語と方言との関係は、支配階級と抑圧階級とのたたかいつてではなく、---文化の伝播の問題である」ととらえられたのである。⁽¹⁾

く言語と方言との関係は、これ以後のく言

語問題^二において、^二きわめて^一微妙な論点を提
供することになる。この問題の意味は、のち
のマンゾーニとアスコリとの対立のなかで、
きわめて重要な位置をしめることになるだろ
う。